

Title	Henryk Grossmann: Die Wert / Preis / Transformation bei Marx und das Krisenproblem.
Sub Title	
Author	奥田, 忠雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1933
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.27, No.1 (1933. 1) ,p.169- 184
JaLC DOI	10.14991/001.19330101-0169
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19330101-0169

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

事實によつて方向づけられたものであつた。然し、この問題は、單にその航海に關する政策のみに就いて見らるべきものではなく、ハンザの貿易政策一般の決定を左右したこと勿論である。

既述の如く、ハンザなる商業資本が獨立的な且つ優勢的な發展を遂げたのは、封建經濟の框内に於いてであつた。素よりこのことはこのハンザが封建的經濟組織に對して分解作用を及ぼしたことを否定するものではない。それは確かに商業資本一般が然るが如く、社會の變化を媒介する作用を有した。これを具體的に云ふならば、この封建經濟から發生せるハンザ同盟が封建經濟の基礎を破壊して資本主義の發生を容易にしたといふ作用こそ、恐らくハンザ同盟に於ける最も特徴的なるものであらう。然しこれは、封建組織の崩壞のいとぐちが見出されて後の問題であることが、注意されて居らねばならないのである。

(1) Sartorius: Op. cit. Tl. II. 1803, S. 698-9.

(2) Danell: Op. cit. II. S. 356.

(3) Cunow: Op. cit. III. S. 147.

Henryk Grossmann: Die Wert-Preis-Transformation bei Marx und das Krisenproblem.

奥田忠雄

フランクフルト・アム・マイン大學附屬の社會科學研究所 (Institut für Sozialforschung an der Universität Frankfurt a. M.) は社會主義並びに労働運動に關する資料、文献を豊富に所藏する點に於て、その比を他に見すと云ふも強ち過言ではあるまい。而もこの研究所の前所長は社會主義史の權威であり、即ち Archiv für der Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung の編輯者として有名な Carl Grünberg である。教授は昨三十二年七十才の高齡を以つてその職を辭し(註)、現在は Max Horkheimer が所長である。

(註) 序にツリェンベルグ教授七十才誕生記念論文集 (Festschrift zum 70. Geburtstag von Carl Grünberg, Leipzig, 1932) の内容を次に紹介して置く。云ふのは、同教授に敬意を表する爲に、獨逸、佛蘭西、和蘭、伊太利、埃地利、波蘭、瑞西、洪牙利の學者二十五名によつて起草された諸論文は、正に社會科學の研究者に取つて貴重な文献たり得べきものである。

Adler, Max: Zur geschichtlichen Entwicklung d. Gesellschaftsbegriffes.

Bauer, Stephan: Der Verfall der metaphorischen Ökonomik.

Henryk Grossmann: Die Wert-Preis-Transformation bei Marx und das Krisenproblem.

Henryk Grossmann: Die Wert-Preis-Transformation bei Marx und das Krisenproblem.

140 (140)

Beer, Max: Social Foundations of Pre-Norman England.

Blom, D. van: Über das Band zwischen historischem Materialismus und Klassenkampffähre und dessen Tragweite.

Bourgin, Georges: Le Communiste Dezamy.

Brigel, Fritz: Andreas Freiherr v. Safft.

Gerloff, Wilhelm: Entwicklungstendenzen in der Besteuerung der Landwirtschaft.

Goldsheid, Rudolf: Die Zukunft der Gemeinschaft.

Grossmann, Henryk: Die Goldproduktion im Reproduktionsschema von Marx und Rosa Luxemburg.

Horkheimer, Max: Hegel und die Metaphysik.

Krzeczowski, Konstantin; Daniel Defoe und John Vancouver als Vorläufer der Sozialversicherung.

Laskine, Edmond: Socialisme, mouvement ouvrier et politique douanière.

Leichter, Käthe: Vom revolutionären Syndikalismus zur Verstaatlichung der Gewerkschaften.

Leichter, Otto: Kapitalismus und Sozialismus in der Wirtschaftspolitik.

Menzel, Adolf: J. P. Proudhon als Soziologe.

Michels, Robert: Eine syndikalistisch gerichtete Unterströmung im deutschen Sozialismus (1903-1907).

Mandolfo, Rodolfo: Il concetto marxistico della „unwäzende Praxis“ e suoi germi in Bruno e Spinoza.

Oppenheimer, Franz: Stadt und Land in ihren gegenseitigen Beziehungen.

Pollock, Friedrich: Sozialismus und Landwirtschaft.

Pribram, Karl: Das Problem der Verantwortlichkeit in der Sozialpolitik.

Szende, Paul: Nationales Recht und Klassenrecht.—Beiträge aus der ungarischen Rechts- und Wirtschaftsgeschichte.

Schneider, Fedor: Zur sozialen Lage des freien Handwerks im frühen Mittelalter.

Sommer, Louise: Das geisteswissenschaftliche Phänomen des „Methodenstreits.“

Wittfogel, K. A.: Die Entstehung des Staates nach Marx und Engels.

Witch, Werner: Der Schatz der bösen Werke.

更に同研究所の所員には、Henryk Grossmann, Friedrich Pollock, K. A. Wittfogel, Felix Weiler 等の有識者
者が居る。そして同研究所の叢書として既に Bd. I: Grossmann, Das Akkumulations- und Zusammenbruchsgesetz
des kapitalistischen Systems. Bd. II: Pollock, Die planwirtschaftlichen Versuche in der Sowjetunion (1917-1927).
Bd. III: Wittfogel, Wirtschaft und Gesellschaft Chinas 等の名著が出版されている。

斯かる豊富な文献と人材とを擁する同研究所が最近「社会科学雑誌」(Zeitschrift für Sozialforschung. Jg. I.
1932 Doppelheft 1/2) を創刊するに至ったことは、吾々社会科学研究者の徒として悦ばしむ次第である。社会科
学、特にマルクス主義研究に利用し得る獨逸語雑誌中、Unter dem Banner des Marxismus は共産黨の機關雑誌と
して、Die Gesellschaft は社会民主黨の機關雑誌として、夫々黨派性が明瞭であるに對し、Schmollers Jahrbuch,
Archiv für Sozialwissenschaft u. Sozialpolitik, Jahrbuch für Nationalökonomie u. Statistik 等は黨派性が不明瞭で
あり、灰色であつて、純理論的雑誌の外観を呈してゐる。茲に紹介した「社会科学雑誌」(Zeitschrift für Sozial-
forschung) も恐らく後者の部類に屬するものであらう。その爲に却つて、理論と實踐を故意に分離し、表面無黨派性
を標榜せざるを得ぬ吾が國の社会科学研究的の現状に於ては、今後この雑誌は社会科学方面の研究者にとつて好個の

Henryk Grossmann: Die Wert-Preis-Transformation bei Marx
und das Krisenproblem.

141 (141)

文献となり得るものであらう。

本来右の「社會科學雜誌」の發刊を紹介することが目的であるが、この際その創刊號に掲載された諸論文中、特にグロースマンの「マルクスに於ける價值の價格への轉形と恐慌問題」(Die Wert-Preis-Transformation bei Marx und das Krisenproblem)を紹介して置きたいと思ふ。と云ふのは、彼はその處女作(註一)によつて、マルクス恐慌理論に一石を投じ(註二)、一躍學界の寵兒となつたからである。

(註一) Das Akkumulations- und Zusammenbruchsgesetz des kapitalistischen Systems. Zugleich eine Krisentheorie. Leipzig 1929. (有澤廣己、森谷克己共譯「資本の蓄積並びに崩壞の理論」改造社)

(註二) 彼の著書に對する批判書の主たるものを擧げば、次の如くである。

Benedikt, Otto: Die Akkumulation des Kapitals bei wachsender organischer Zusammensetzung. Unter dem Banner des Marxismus. Jg. III. H. 6. Dez. 1929. (入江武一譯「資本主義の蓄積と崩壞」南蠻書房、有機的構成が増大する場合に於ける資本の蓄積、八七一—一八〇頁)

Braunthal, Alfred: Der Zusammenbruch der Zusammenbruchstheorie. Die Gesellschaft. Nr. 10. Jg. VI. Okt. 1929.

Varga, Eugen: Akkumulation und Zusammenbruch des Kapitalismus. Unter dem Banner des Marxismus. Jg. IV.

H. 1. Feb. 1930. (入江武一譯「資本主義の蓄積と崩壞」三一—八四頁)

Kraus, Die marxistische Zusammenbruchstheorie. Die Internationale. Jg. XIII. H. 1/2, 3, 4. Jan.-Feb. 1930. (L. H.

ユンスキー、クラウス「資本蓄積と恐慌の理論」八五—一二四頁)

カール・シュミット「二つの資本主義崩壞理論の批判」日本版マルクス主義の旗の下に、六號、六三一—六八頁

南部誠一郎「マルクス恐慌論序説」改造社版經濟學全集一四卷、二七五—三三三頁

既にこの論文の表題が明かに示して居るように、グロースマンは、マルクス恐慌理論が直接價值表式から解決されるものではなく、價值の轉形たる價格表式を介して初めて説明され得ることを主張せんとする。更に詳しく云へば、従来のマルクス解説家(ツガン、バラノウスキー、ローザルクセンブルク、オットオ・パウエル、ヒルファディング等)は單に資本論第二卷第三篇の再生産表式(價值表式)の範圍内で恐慌理論を説明しようとする。だが現實の恐慌は商品價格の變動から起るものである。従つて恐慌は價值表式のみを以つてしては説明されるものでなく、價值表式は單に説明の中間過程であり、寧ろ實際上資本家間の競争によつて生ずる平均利潤率の形成並びにその爲に商品が價值に於て販賣されず、その生産價格に於て販賣される等の過程を介して初めて説明され得る。であるから、現實の恐慌は、價值の價格への轉形の過程を取扱ふ所の資本論第三卷に於て、その完全な説明を見出すのである。

さて、彼は第一節「マルクスの認識の對象及び目的としての具體的現實性」に於て、マルクスの方法論を述ぶ。マルクスは具體的現實性を理解することを以つて科學の任務として居る。然るに具體的現實性は頗る複雑であつて多様な規定が統一されてゐる。その爲に思惟は直ちに具體的現實性を把へることは出来ない。そこで最初には複雑な現象世界から多くの規定を抽象して去つて、夫等現象の内部的關聯、法則、即ち本質を暴露する。であるから認識の第一過程は現象から本質へ、具體から抽象への下向である。そしてマルクスの一つの功績は正にこの點にある。と云ふのは、俗流經濟學者が直接與へられた現象形態——それは屢、本質と一致せず錯倒した姿で現はる——に囚はれずして、その隠蔽された本質を暴露したからである。

然しマルクスは、具體的現實性を認識することを本來目的としてゐる以上、法則、本質の暴露を以つて満足する

く、他方現實の資本主義には、單に企業家利潤、利子、商業利潤、地代等の種々の利潤形態が存するみである。だから表式の各生産部門に示された剰餘價值は理論上の假定であり、直接現實に適應しはしない。

同様のことが第三の要素たる利潤率にも當嵌る。再生産表式に於ては、商品が價值通りに交換されることを假定して居る以上、第一部門と第二部門との資本の有機的組成が異なるに従つて夫々利潤率が異なる筈である(例、第一部門三〇パーセント、第二部門、三三パーセント)。然るに現實の資本主義に於ては競争が行はれるからして、個々の部門に於ける相違した利潤率を一般的に、即ち平均利潤率(例二五パーセント)に變せしめる傾向が強く支配してゐる。そこで平均利潤率が存するが爲に、商品はその價值に於て販賣されず、常に價值とは異なり、平均利潤率を齎らす所の生産價格によつて販賣さる。(Vgl. Kapital, Bd. III, 2, S. 293. Mehrwert, Bd. II, 1, S. 17)

斯くの如く、再生産表式は理論的、假定的性質を有するのであり、具體的現實性とは相違し、矛盾してゐる。而もその相違は單に一時的のものではなく、本質的に異なるものである。即ち價格の價值からの偏差は、丁度市場價格の變動のように、單なる一時的のものではなく、寧ろ事實起つて來る所の價值の生産價格への轉形は「價值からの不斷の偏差を生ぜしめる」(Mehrwert, Bd. II, 1, S. 164)だからマルクスは云ふ。「夫故價值論はこの場合現實の運動、生産の實際の現象と一致せず、従つて又後者を理解することが總て斷念されなければならぬように思はれる」(Kapital, Bd. III, 1, S. 132)

そこでグロスマンは、第三節「資本制生産の調節器としての生産價格及び一般利潤率」に於て、現實の資本主義の機構を理解するが爲には、再生産表式に示された價值並びに相違せる利潤率の代りに、生産價格及び平均利潤率なる範疇に重きを置くことを主張する。即ち曰く、「理論上假定された價值ではなく、寧ろ經驗上與へられた

生産價格が客觀的な重點をなし、その周圍を日々の市場價格は動搖する。具體的の資本運動にとつては、表式に於て理論上假定された異なる利潤率がではなく、寧ろ經驗的に與へられた一般的平均利潤率が決定的に重要である。」と。(Sozialforschung, S. 62)そしてこの主張を確認する爲に資本論第三卷から多くの引用をなしてゐる。(Vgl. Kapital, Bd. III, 1, S. 12, 132, 241, 396, 422. Bd. III, 2, S. 181, 187, 316, 355, 364, 381, 396 u. a.)

更にこの生産價格並びに平均利潤率を介して初めて、商人資本の商業利潤、貨幣乃至銀行資本(更に金融資本)の利子、及び地代の如き具體的な利潤の部分形態が説明され得るのである。これに反して、若し再生産表式に於ける如く、商品が價值通りに販賣されることを假定するならば、價值及び剰餘價值の直接生産者たる産業資本家が凡ゆる剰餘價值、従つて利潤を占有し、直接價值及び剰餘價值の生産に参加せざる商人資本の商業利潤、貨幣乃至銀行資本の利子、地代等は説明され得ない。これ等の現實に存する利潤の部分形態は、資本間の競争による平均利潤率の形成、價值の生産價格への轉形、従つて生産價格の價值からの偏差を介して初めて解決され得るのである。

だからして、現實の資本運動の土臺をなしてゐるこれ等の實在的範疇——平均利潤率、生産價格——を缺いてゐる所の價值表式は、マルクスが資本論第一卷で述べてゐるように、確かに歴史的發展傾向を、従つて資本蓄積の一般法則を認識せしめるけれども、然し資本の具體的運動形態を思惟に於て再生産するを得しめない。それ故にこそ個々の生産部門の均衡乃至不均衡に就いて價值表式から導かれた結論(從來のマルクス恐慌理論)は證明力を持たないし、又少くとも早計に失してゐる。

斯く經驗的に與へられた諸範疇——生産價格、平均利潤、一般利潤率——が資本制生産の調節器であり、推進力であるならば、價值などは何等の役割も演ずるものではなからうかとの疑問が生ずる。この疑問に對し、グロスマン

マンは第四節に於て、「價值表式は歴史上並びに理論上の出發點である」と答へる。(註)

(註) 歴史的なもの論理的なもの、辯證法的統一に就いては、拙稿「辯證法の基本的諸特徴と體系」に就いて「三田學

會雜誌、昭和七・六、九二—九八頁参照

第一に、價值は歴史上生産價格に先だつものである。即ち「各生産部門に固く据えられた生産手段が殆んど一部門から他部門へ移すことが困難である限りに於て」(Kapital, Bd. III, 1, S. 156) 換言すれば、資本の移動に對して法律上乃至實際上の障礙が存し、その爲に一般利潤率の形成が妨げられる限りに於て(Kapital, Bd. III, 1, S. 292)、手工業者、農夫等の獨立生産者の營む單純な、前資本制商品生産の時代に價值法則はそのまま妥當する。この單純商品生産の時代にのみ、商品がその價值に於て交換されることが單なる理論上の假定にとゞまらず、更に事實上の現象でもあつて、市場價格の日々の動搖は價值をその重心として、その周圍を動搖する。(Kapital, Bd. III, 1, S. 157)それ故マルクスは、明かに次のように述べてゐる。要するに、諸商品がその價值通りに、又は略、その價值通りに交換せられるといふことは、生産價格で交換されるのに比し遙かに低級な一段階を前提するものであつて、この後の場合に對しては、資本制度の發達が或る一定の水準に達してゐることを要する。…それ故、價格並びに價格運動が價值法則に依つて支配されるといふことは暫く措き、商品の價值が單に理論上のみでなく歴史的にも生産價格に先だつものを見るは、全く適切なことである。(Kapital, Bd. III, 1, S. 156)

第二に、價值は生産價格が導き出される理論上の前提でもある。蓋し資本制商品生産に於ては、價值の交換に於ける役割は、單純商品生産に於けると異なり、修正を蒙るのであつて、諸商品は價值と量的に異なる所の生産價格によつて交換され、その際價值は單に生産價格を導き出す爲の理論上の前提たるにとゞまる。生産價格は資本制生

産の調節器であり、資本の移動、即ち個々の生産部門間の資本の絶へざる流出入を決定し、従つて社會的總資本の配分を決定す。だからして又社會的總資本の配分の均衡乃至不均衡を決定するのは、價值ではなくして生産價格である。だがブルジョア經濟學は生産價格を單に事實として取るにとゞまり、進んでその成立を證明しないが、他方マルクスは、生産價格そのものが價值から導き出される筈であり、斯かる導出なくしては「一般的利潤率(従つて又商品の生産價格)は無意義無内容な概念たるにとゞまる」(Kapital, Bd. III, 1, S. 136 und Mehrwert, Bd. II, 1, S. 36, 37) ことを證明したのである。然しこのことは、次の事柄を否定しはしない。即ち、個々の生産部門に於ては、價值がではなく、寧ろ生産價格が中心をなし、その周圍を日々の市場價格が動搖し、且つ「日々の市場價格は一定期間に於て生産價格と均衡する」(Kapital, Bd. III, 1, S. 158) こと、更に價值ではなく、生産價格が生産、その範圍及び資本の配分を統制し、従つて正に恐慌が資本配分の不均衡に歸される限り、生産價格は恐慌を理解する上に決定的意義を有する諸要素を決定することを否定しはしない。

こゝに於てか、ローザルクセンブルク並びにその追隨者、更に又ヒルファディング、オットオ・パウエル等の證明は最初から誤つて居る可きことが明かとなる。と云ふのは、彼等は、諸商品のその價值に於ける交換を認める所の従つてマルクスによれば、發展の「より低級な段階」、即ち前資本主義的商品生産を表はす所の價值表式に基いて、資本主義の恐慌法則を實證したり又は否定しようとするからである。それ故彼等は、發展せる資本主義に對し決定的な生産價格表式を看過し、従つて正に生産價格、平均利潤率の如き、發展せる資本主義に於ける資本配分の均衡乃至不均衡に對し決定的なる凡ゆる要素を看過したのである。

確かにマルクスは、資本論第二卷(殊に第三篇)に於ては、恐慌問題を價值表式の分析から初めてゐる。然し現

實性とは縁の遠い、且つ第一にそれと矛盾するようなこの抽象の段階に於ける彼の證明は決定的のものでもなければ、又そうあり得るものでもない。それは單に前段階的性質のものであり、「資本論」第三卷の理論、即ち價值の生産價格への轉形の理論によつて完全ならしめられるのである。價值表式は、マルクスの分析に於ては、全く萌芽形態であり、接近法の第一の段階であり、價格への轉形の連鎖によつて初めて完全ならしめられる筈である。

恐慌法則の分析が資本主義の實在を證明し得るが爲には、その分析は價值表式、即ち接近法の第一段階に局限されて居つてはならず、寧ろ常にその諸段階を追求し、従つて又生産價格表式に基いて證明がなされねばならぬ。そこでグロスマンは、第五節に於て「恐慌問題とマルクス資本論第三卷の理論」との關係を述べ、上記の如く、マルクスの理論は資本制生産の統制力を平均利潤並びに生産價格に認めるのであり、従つて價值ではなくその轉形たる生産價格に市場價格變動の重心を認めるのであるにも拘らず、ローザ・ルクセンブルク、オットオ・パウエル等は、この機能を價值に與へてゐる。彼等にあつては、價值表式の關係はマルクスに於けるように、接近法の第一階段たるにとゞまらず、寧ろ直接現實性を反映するものとされてゐる。この價值表式に關するマルクスとローザ、パウエルとの間の見解の相違からして、又恐慌問題の分析にも異つた結論が生じて来る。「資本論」第二卷に於ける再生産表式は價值と、——競争を抽象する爲に——相違した利潤率とから構成されてゐるから、現實には適合しない。價值論が現實の現象と矛盾しないで、寧ろそれを説明するが爲には、「資本論」第三卷の理論と一致して、價值が競争の爲に具體的生產價格へ轉形すること、即ち一般利潤率や最後に經驗的の諸利潤形態（利子、地代、商業利潤）へと導く所の一連の中節を研究しなければならぬ。然るにも拘らず、ローザやパウエル等は全「資本論」第三卷の理論を犠牲にし、専ら前提段階なる價值表式に固執し、マルクスの接近法を放棄してゐる。

それ故にこそ、ローザの如きは、マルクスの再生産表式（價值表式）は矛盾してゐると云ふ結論に達したのである。今マルクスの單純なる再生産表式を思ひ浮べて見る。

$$I. \quad 4000c + 1000v + 1000m = 6000 \quad \text{生産總額} = 20\%$$

$$II. \quad 2000c + 1000v + 1000m = 4000 \quad \text{利潤率} = 33\%$$

右の表式が示す如く、第一部門（生産手段の生産部門）と第二部門（消費資料の生産部門）とは夫々資本の有機的組成が異なり、第二部門は第一部門に比し有機的組成の程度が低く、可變資本部分の不變資本部分に對する割合が第一部門のそれよりも多いからして、従つて利潤率は高い。そこでローザは、第二部門に資本は集中し、消費資料の過剰生産が絶えず生じ、第二部門の剩餘價值の一部は填補、實現されず、常に不均衡が生じ、右の均衡表式は成立し得ないと。斯かるローザの批判は、マルクスの抽象から具體への接近法、即ち競争、平均利潤率の形成を介して價值の具體的生產價格への轉形を取扱ふ所の第三卷の無理解に起因す。これに反し、競争による一般利潤率の形成、従つて價值が生産價格に轉形し、諸商品が生産價格に於て交換されることを思ひ浮べるならば、斯かる反駁はその土臺から覆へされて終ふ。と云ふのは、生産價格に於ては、第一部門の商品は第二部門の商品に對し價值以上に賣られ、反對に第二部門のそれは價值以下に賣られるからである。即ち、交換に提供される第一部門の $4000c + 1000v$ の價值ある商品は第二部門の 2500 の價值ある商品と交換される。斯くて第二部門の剩餘價值の一部は交換によつて第一部門に移される。そこで第一部門に於ては、本來得た所の 1000 の剩餘價值よりも大なる利潤（即ち 1250 ）が得られ、投下資本總額 $4000c + 1000v$ に對し 25% の利潤率が生ずる。他方第二部門に於ては、本來

の剰余価値(即ち 1000)の代りに單に 750 の利潤が残り、200c + 1000v の投下資本總額に對し等しく 25% の利潤が生ずる。約言すれば、價值表式に於ける利潤率の相違から生ずる第二部門の過剰生産は生産價格表式に於ては起り得ない。それ故ステルンベルヒの云ふローザの「確固たる命題」はシャボン玉の如く消へ失せて終ふ。この各生産部門間に於ける利潤率平均化の傾向は經驗的に證明された事實であり、マルクスにとゞまらず既にリカードオ、マルサスにより、又最近にはボエム・バエルクその他によつても認められてゐる。問題は唯この事實の説明方法に相違があるのであり、且つこの説明が困難なるが爲に殊に後期リカードオ學派の者は失敗に終つたのである。それはと云ふに、彼等は平均利潤率なる事實と労働價值説とを調和せしめることを知らなかつたからである。茲にマルクスの偉大なる歴史的使命があつたのである。彼は、生産價格と價值との偏差の理論によつて、一見労働價值法則と矛盾する如き平均利潤率なる事實をこの價值法則から説明するに至つたのである。

斯くの如く、マルクスは接近法により労働價值説から一般利潤率の形成並びに價值の生産價格への轉形を導き出し、以つて労働價值説を是等の諸事實と一致せしめたのであり、それによつて彼は後期リカードオ派の失敗するに至つた點以上に經濟理論を更に發展せしめたのである。それにも拘らず、從來マルクスの恐慌論及び蓄積論に關する論争は専ら價值表式に局限され、これ等の問題に對する平均利潤率、生産價格の意義、從つてマルクスのこの特殊な理論的功績は全く没却されてゐる。ローザ・ルクセンブルク、オットオ・パウエル、ヒルフディング乃至はブルリンにしても、彼等は總て現實性から縁遠い價值表式の範圍にその分析をとゞめ、この表式が現實性への第一の接近に過ぎぬものであり、決して現實性そのものを表はすものでないことに氣附かぬのである。彼等は現實の資本制生産の調節器たる生産價格並びに平均利潤率を度外視して恐慌を論ずる以上、何等恐慌の現實性を認識するに至らぬことは明かである。

(註) このことはルービン (J. J. Rubin, Skizzen zur Marxschen Wertheorie. 4. Aufl. Moskau 1929, russisch) によつて知られる。即ち彼は「労働價值の理論と生産價格の理論とは二つの異なる經濟形態に對する理論を表はすものではなく、寧ろ科學上の抽象の二つの段階に於て同一の資本主義的經濟を表はす所の理論である」(S. 217) を主張して居るが、然し彼は詳細に價值の生産價格への轉形の問題や、それから恐慌問題に對して生ずる斷絶を取扱つてはゐない。同様なことは、數多々の他の著者にも當てられる。例へばディヒル (K. Diehl, Über das Verhältnis von Wert und Preis im ökonomischen System von Karl Marx, Jena 1898)、シガン・バラン・タンスキー (Tugan-Baranowsky, Theoretische Grundlagen des Marxismus, Leipzig 1905, bes. S. 174 ff.)、キルトキヤンチ (v. Bortkiewicz, Wirtschaftung und Preisrechnung, Archiv f. Sozialwiss. 1907 und, Zur Berichtigung der grundlegenden theoretischen Konstruktion von Marx im III. Band des „Kapital“ in Conrads Jahrb. f. Nationalök., 1907) 並びに最近に於ては、ハン・ス・ツァイニル (Hans Zeisl, Ein Einwand gegen die Marxsche Wertlehre, „Der Kampf“, Wien 1930)、エミール・ワルター (Emil Walter, Liquidation der Arbeitswertlehre?, ebenda) 等がある。彼等は總て價值計算と價格計算とを中心問題に置いてはゐる。然し彼等は専ら、マルクス流に價值から生産價格を導き出すことが正しいか否か、又それがマルクス價值論と一致し得るか否かを取扱ふにとゞまり、孰れの著者も恐慌問題に對する價值の生産價格への轉形の意義を認識してはゐない。

こゝに於てか、グロースマンは第六節に於て、從來のマルクス恐慌理論に關する論争は「マルクスを越へての更に發展の代りに——リカードオへの退歩」であると結論す。

以上がグロースマンの論文の概要である。吾々はこの際彼に對し詳細な批判を加へることを避く。と云ふのは、

